

扇状地開発のあゆみ

中南部土地区画整理事業に係る発掘調査の成果から



粟田遺跡

2006文化財企画展 開催会場

1. 野々市町文化会館フォルテ 2階 セミナールーム

11月 2日(木)～11月 5日(日) 午前9時から午後5時まで[最終日は午後4時まで]

2. 富奥公民館 1階 食堂

11月 7日(火)～11月19日(日) 午前9時から午後5時まで[13日(月)は休館日]

3. 野々市町ふるさと歴史館 1階 第1展示室

11月21日(火)～12月 3日(日) 午前10時から午後4時まで[24日(金)・27日(月)は休館日]

はじめに

私たちの住む野々市町^{ののいちまち}は、手取川扇状地^{てどりがわせんじょうち}東部の扇央^{せんおう}から扇端^{せんたん}に位置します。

手取川扇状地は石川県最大の河川、手取川によって長い年月をかけて作られました。この扇状地上には、縄文時代から今日に至るまでのさまざまな人々の営みの跡が残されています。

近年、野々市町では次々と土地区画整理事業などの開発が実施され、これに伴って数多くの発掘調査を行ってきました。平成10(1998)年から始まった野々市町中南部土地区画整理事業に伴う発掘調査もその一つで、三納^{さんのう}・藤平田^{とへいだ}・粟田^{あわだ}を主な範囲とします。この事業によって、すでに知られていた粟田遺跡のほかに、新たに三納アラムヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡・三納ニシヨサ遺跡・藤平田ナカシンギジ遺跡が発見され、発掘調査が行われました。こうして手取川扇状地扇央部での人々の営みが少しずつ明らかになってきました。

私たちの祖先はいったいどのようにしてこの手取川扇状地を開発してきたのでしょうか？ 今回の発掘調査から得られた成果を中心に見ていきたいと思えます。



中南部土地区画整理事業地区域(北から)

手取川扇状地とは

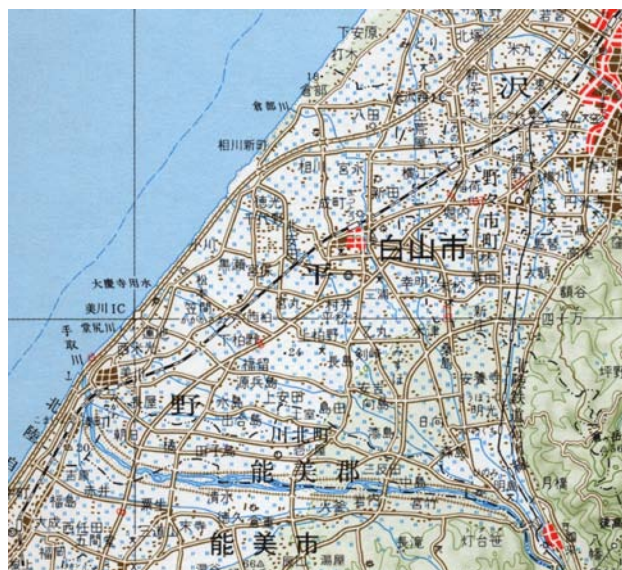
手取川扇状地は手取川の流れによって作られた地形です。手取川は白山^{はくさん}を源とする上流では高低差が大きく急流となるため、多くの土砂を運んでいきます。しかし白山市鶴来^{はくさんしつるぎ}あたりで平地を流れるようになると、水流もゆるやかになり土砂を運ぶ力がなくなっていく。こうして、上流から流れてきた土砂は堆積^{たいせき}して、その部分が高くなります。このため洪水が起こると、左右のより低い土地に川が流れるようになり、ゆるやかな傾斜^{けいしゃ}のある地形ができます。これを上空からみると、ちょうど扇^{おうぎ}を開いた形に見えるので、扇状地と呼ばれます。

扇状地には扇頂、扇央、扇端があり、それぞれ環境は大きく違います。

扇頂は山から平地へと移る部分で扇状地の始まる場所です。手取川扇状地では鶴来あたりになります。河原には急流によって運ばれてきた多くの岩石があります。

扇央は扇状地の中央部分です。川から運ばれてきた土砂が堆積したため、やや高くなっており、このため地面から地下水までの深さが比較的深くなっています。現在の町役場周辺が扇央にあたります。

扇端は扇状地の末端になります。山から運ばれてきた土砂も、ここまではあまり流れてこないので標高は低くなります。地下水までは浅く、少し穴を掘れば地下水が得られます。扇端である御経塚^{おきょうづか}や二日市^{ふつかいち}のあたりでは、数十年前ぐらいまでは自然に水が湧き出していたといわれています。



手取川扇状地付近地図

扇状地開発のあけぼの—縄文～古墳時代—

手取川扇状地での人々の営みは、縄文時代後期(約4000年前)まで遡ります。

この時代の集落跡は、豊富な湧き水に恵まれ野々市町の御経塚遺跡など扇端部に多く見られます。一方、扇央部では、集落跡は少なく、またその存続期間も短期間だったことが分かっています。これは川以外には水を得る方法がなかったことと、その川がたびたび氾濫を起こし、生活を脅かしたことが考えられます。

中南部地区では縄文土器や打製石斧などは出土するものの、集落跡は発見されていません。

弥生時代(約2500年前)に入ると遺跡の数は減少しますが、稲作が普及すると扇端部を中心に少しずつ遺跡が増え、弥生時代末期には上新庄ニシウラ遺跡など扇央部でも集落が出現します。

やがて現在の近畿地方を中心とする地域に大和政権が誕生し、古墳時代が始まります。(約1800年前)手取川扇状地も大和政権の勢力化に入り、扇端部の御経塚シンデン古墳群などが作られます。これにより進んだ技術・文化が伝わり、この地の首長によって統率された労働力とともに扇央部の開発の原動力となります。

中南部地区からは古墳は見つかりませんが、すぐ南の上林では過去の調査によって上林古墳が発見されています。また、末松の大兄八幡神社の境内にも古墳の名残を見ることができます。



上林古墳横穴式石室

大開発の時代—奈良・平安時代—

飛鳥時代(約1400年前)から始まった扇央部の開発は、奈良・平安時代前期(約1100~1300年前)になって爆発的に拡大します。この時代の遺跡は扇央部の一部に位置する野々市町だけでも、上林新庄遺跡群・末松遺跡群・粟田遺跡を中心に約20もの遺跡が知られています。この中には県内最古の寺院として有名な末松廃寺すえまつはいじもあります。

さらに今回の中南部土地区画整理事業に際して、新たに三納アラムヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡・三納ニシヨサ遺跡・藤平田ナカシングジ遺跡が発見され、また粟田遺跡の範囲がさらに南側に広がっていることが確認され、この時期の開発が扇央部の広い範囲にまで及んでいたことが明らかになりました。しかし、なぜこれほど急激に広い範囲で開発が進んだのでしょうか？

扇央部は手取川によって流されてきた多くの石が地面に埋まっていることと、地下水位が低く乾燥しがちなため、大規模な開拓と灌漑かんがい工事が必要ですが、この時期には律令国家の確立により組織的に労働力を動員することができるようになりました。またこれまで貴重品であった鉄製道具が一般にも普及しはじめます。こうして開発された土地は、扇端部の低湿地ていしっちで行われる古からの稲作より効率よく収穫できることひやくてきもあり、飛躍的に開発が進んでいきます。



末松廃寺

発掘された古代のムラ

今回の調査では、粟田遺跡と三納アラミヤ遺跡から古代の人々が居住した^{たてあな}竪穴住居（住居の範囲全体を掘って柱を立てる建物）や^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物（地面に穴を掘ってそこに柱を立てる建物）の跡が見つかっています。これらの建物跡は2・3棟ずつがひとかたまりになって建てられていて、そのかたまりがあちこちに点在しています。竪穴住居の跡からはかまどの跡が見つかることもあり、かまどの周辺からは食物の煮炊きに使ったと思われる土器のかけらが出てきました。また、集落のそばを流れていた川の跡からは多くの土器が出てきています。昔の川は、割れて使えなくなってしまった土器を捨てたゴミ捨て場だったのです。

田んぼの跡を見つけることはできませんでしたが、畑の跡と考えられる^{みぞ}溝の跡が出ており、この時期には稲作や畑作が行われていたと考えられます。また、鉄製品ですが、^{くわ}鍬や^{かま}鎌など直接的な製品は出土していませんが、鉄製品を作る際にでる鉄くずが出土しています。粟田遺跡の南にある上林新庄遺跡からは、過去に行われた調査によって製鉄に使うフィゴという道具や、小刀や釘のようなものも出土しており、このあたりでも鉄製品が使われ始めたことが分かっています。



竪穴住居跡と掘立柱建物跡（粟田遺跡平成15年度調査）

武士の時代—鎌倉・室町時代—

平安時代中期(約1000年前)からしばらくのあいだ扇中央部の開発は放棄されたりし、遺跡は減少します。そして次に集落が現れるのは鎌倉時代(約800年前)です。

この時代の主役は武士です。彼らの多くは地方の豪族で、この地の役所に勤めて力を蓄え、扇状地の開発に乗り出していきます。

はじめ現在の鶴来から野々市を本拠とした林氏が勢力を伸ばしていましたが、承久の乱(1221年)で没落し、代わって富樫氏が台頭してきます。

この時期の遺跡としては扇が丘ゴシヨ遺跡や扇が丘ハワイゴク遺跡があり、この地域の領主クラスと思われる屋敷跡が見つかっています。

富樫氏はもともと現在の金沢市四十万を本拠地としていましたが、次第に勢力を広げ、室町時代(約700年前)になると守護に任命され、現在の野々市町住吉町・扇が丘一帯に守護所(富樫館跡)を置いて加賀の国を治めました。当時の野々市は水陸交通の重要な場所にあたり、商業活動の活発なところでした。こうして野々市は加賀国の政治・経済の中心として繁栄しました。

過去に実施した発掘調査によって、富樫館跡の周囲に巡らされていた堀跡の一部が発見されたほか、まわりからは居住区や工房と思われる跡が検出されています。



扇が丘ハワイゴク遺跡の復元イラスト
(橋本尚子画・図説野々市町の歴史より)

発掘された中世の村

今回調査を実施した中南部地区は富樫館跡から1～2km西南に位置しており、各遺跡から中世の集落跡が発見されました。

この中で、三納ニシヨサ遺跡の発掘調査からは意外なことが分かりました。

この遺跡は南側に居住地となる掘立柱建物跡や竪穴状土坑(大型で四角い穴)などが密集しており、一方北側にはあまり建物跡などはなく、耕作地と思われる何本もの細い溝や空閑地がありました。

このように居住地と耕作地が南と北に分かれているのですが、それぞれの地面には大きな違いがあります。南側の居住部分の地面には一面に大小さまざまな石が埋まっているのです。それに比べて北側の耕作地はほとんど石のないきれいな土の地面でした。

このことから当時の人は石のないきれいな土地を選んで田んぼや畑のような耕作地とし、耕作地として適さない石混じりの土地に努力して集落を作って居住したと考えられます。

また、この三納ニシヨサ遺跡からはさまざまな土器や珠洲焼・加賀焼(石川県)・越前焼(福井県)瀬戸焼(愛知県)中国製の青磁・白磁等の陶磁器などの遺物が出土しています。特に遺跡の一番北側の土坑(大きめの穴)から出土した銅鏡は、裏面に菊の花や鳥などの模様があり、富樫氏に仕えた身分の高い人が居住していたのかも知れません。



三納ニシヨサ遺跡(平成12年度調査)

よみがえる栗田村—戦国・江戸時代—

現在の野々市町栗田地区は、昭和30年までは栗田新保村^{あわたしんぼ}という名前でした。『石川県石川郡誌』には、この栗田新保村という地名の由来について次のような伝説を載せています。

「数百年前、栗田村と新保村があった。栗田村は豊田日吉神社^{とよたひよし}の西方一、二町(一町は約109m)にあったが、たびたび洪水があつて浸水し、住民が安心できなかったので、全部新保村に移住し栗田新保村と呼ぶようになった」

ただ、この伝説以外に栗田村の存在を証明する資料はなく、伝説が事実であるのかどうか分かりませんでした。

ところが今回の発掘調査によって、豊田日吉神社の西方約150m付近から多くの戦国^{せんごく}～江戸時代^{えど}初め(約300～400年前)の集落跡が発見されたのです。このあたりの地面も三納ニシヨサ遺跡と同じく大小多くの石が埋まっていますが、そこから石を取り除いた整地層^{せいちそう}や、周りに2～3段の石列を積んだ土坑、大小のピット、土地を区画した溝、素堀りの井戸などが見つっています。そして、これらの遺構からは、瀬戸^{せと}焼(愛知県^{あいちけん})伊万里焼^{いまりやき}・唐津焼^{からつやき}(佐賀^{さが}・長崎県^{ながさきけん})などで作られた陶磁器が大量に出土しました。

こうして栗田村の存在が確認されたのでした。



栗田遺跡(平成17年度調査)

江戸時代になると建物は掘立柱建物から地面に平らな石を置き、その上に柱を立てる礎石^{そせき}建物へと変わっていきます。石は地上に出ているため発掘調査の際にはすでになくなっていることが多く、全容は分かりませんが、いくつかの基礎となるような石が検出されたことから、栗田遺跡にも礎石建物があつたと考えられます。したがってこの時期になると、前述の整地層や土坑、井戸などとともに村を切り開くために大規模な土木工事が行われていたことが分かります。

このように多大な努力によって作られた栗田村ですが、伝説によればたびたび起きる氾濫によって、結局は村を放棄して現在の栗田に移り住むことになったようです。

こうして栗田村は土の下に埋没していったのです。



石列と整地層



伊万里焼皿出土状況